

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### 名訳

- 誠実な美女 - 村上博基訳『スマイリーと仲間たち』  
翻訳では、原文への忠実さと訳文の美しさは両立しないというのが通り相場になっている。ところが村上博基は、まさにこの不可能にかぎりなく近い翻訳を行っている

### 翻訳の現状

- 翻訳教育は可能か  
翻訳を学ぼうとする人たちが必要としているのが翻訳教育なのかどうか、おおいに疑問だと思う。何よりもまず、日本語の執筆と外国語の読解を学ぶ必要があるのが通常だ。

### 翻訳批評

- 『国富論』既訳の問題点 - 第1編第3章  
『国富論』には多数の既訳があり、いくつもの名訳があるのだから、いまさら新訳を出す意味も余地もないだろうと思えるかもしれない。しかし、決定的な点で既訳には問題があり、新訳の余地が十分にあると考える。そう考える理由をあげておこう。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 誠実な美女 - 村上博基訳『スマイリーと仲間たち』

ジョン・ル・カレのスマイリー 3 部作を原著で読むと、呆然としてしまう。重くて暗くて、ときとして難しい。オックスブリッジによるオックスブリッジのための小説、アメリカで数十万部も売れたというのはほとんど冗談だと思えない。最後まで読みとおした人がいったい何人いただろうか。

3 部作の最後を飾る『スマイリーと仲間たち』が出版されたのは 1980 年 1 月というから、ちょうどレーガン候補がソ連の脅威に強硬姿勢でのぞむよう主張していたころだ。当時、ソ連は怖かった。ソ連という国自体があっけなく崩壊した後になってみれば、KGB の恐ろしさを背景としたスパイ小説など、誰が読むかと思えるかもしれない。だが、優れた小説は時代を超える。大衆小説だったものが古典になる。ル・カレのスマイリー 3 部作もそういう小説なのだと思う。

キルビー事件といっても、もうピンとくる人は少なくなっただけだ。だが、イギリスの情報機関といえば、大英帝国の栄光を支えた伝統ある組織だ。オックスブリッジの粋が集まる組織。その中枢にソ連の二重スパイが入り込んでいた。情報機関を崩壊させただけではない。大英帝国を支えていた強固な階級制度の権威を一挙に失墜させたのがキルビー事件というある種の悲劇であった（日本経済を支えてきた官僚制度の権威を一挙に失墜させたのは喜劇ですらなく、ノーバンしゃぶしゃぶ事件というお笑いだったのだが）。60 年代以降、イギリスで花開いたスパイ小説のうちかなりの部分は、このキルビー事件を下敷きにしている。そのなかで最高傑作を選ぶとするとおそらく、ル・カレのスマイリー 3 部作、なかでもこの『スマイリーと仲間たち』ではないかと思う。

プロットとスピード、平易な文章で読ませるのがエンターテインメント小説の王道だとするならば、この小説は正反対の道を選んでいるともいえる。意地になっていると思えるほど細部の描写にこだわる。だから、重くて遅い。そして、重くて暗い現実をありのままに描くからこそ生まれる諧謔がある。

ル・カレはスマイリーという年老いた英雄を作り出すことによって、大英帝国の栄光を虚構の中で取り戻し、同時に、大英帝国の伝統を蘇らせる小説を書こう

としたのではないかと思える。イギリスは政治や軍事、情報、経済の世界ではたしかに栄光を失った。しかし、文学ではイギリスに優る国はないと言いたかったのではないか。そう思えるほど力の入った作品だ。

これほどの小説を誰が訳すのかと考えると、村上博基以外には見当たらない。ためしに、酒飲みながら、寿司食いながら、翻訳家の品定めをする場面を想像してみると、当代切っ手の翻訳家の候補にあがらぬはずがないのが、村上博基だ。

文章力がすごいなどといっただけではいけない。翻訳家なら、当然のことなのだから（まともに文章を書けない自称翻訳家が多すぎるのは困ったことだが）。注目すべきは、作品の性格によって、原著の文体によって、訳文の文体をさまざまに使い分けていることだ。ひとつの文体で名文を書ける人はいる。だが、いくつもの文体で名文が書ける人はそうはいない。まして、翻訳では、『女王陛下のユリシーズ号』、『勇魚』、『スマイリーと仲間たち』、『影の巡礼者』、『容赦なく』、『超音速漂流』を読み比べてみるといい。文体の幅の広さに驚嘆するはずだ。

前置きはこのくらいにして、『スマイリーと仲間たち』の翻訳をみてみよう。訳書はハヤカワ文庫版、原著は Bantam Book による。

一見関係のないふたつの出来事が、ミスター・ジョージ・スマイリーを、そのあやぶまれた引退生活からよびもどすことになった。最初の出来事の背景はパリ、季節はうだるような八月、例のごとくパリジャンが、灼けつく日ざしと、バスでくりこむ団体観光客に、街を明け渡すときであった。(7 ページ)

Two seemingly unconnected events heralded the summons of Mr. George Smiley from his dubious retirement. The first had for its background Paris, and for a season the boiling month of August, when Parisians by tradition abandon their city to the scalding sunshine and the bus-loads of packaged tourists. (p.1)

ジョージ・スマイリーを引退生活からひっぱりだしたふたつの事件のいまひとつは、最初の事件の数

週間後、おなじ年の秋口に起きた。こんどはパリではなくて、かつてはいにしへの趣きと自由の気風をとどめていたハンザ同盟ゆかりの地、いまはおのが繁栄の喧騒に息も詰まらんばかりのハンブルグの町でだった。とはいえ、まだだれも水を抜いたりコンクリートで埋めたりしていないアルスター湖の、オレンジ色と金色の湖岸ほど、ゆく夏の壮麗さを見せるところはないのは、いぜんたしかである。もとよりジョージ・スマイリーは、そのものうい秋の壮麗を見ていたわけではない。・・・(38 ページ)

The second of the two events that brought George Smiley from his retirement occurred a few weeks after the first, in an early autumn of the same year: not in Paris at all, but in the once ancient, free, and Hanseatic city of Hamburg, now almost pounded to death by the thunder of its own prosperity; yet it remains true that nowhere does the summer fade more ap splendidly than along the gold and orange banks of the Alster, which nobody as yet has drained or filled with concrete. George Smiley, needless to say, had seen nothing of its languorous autumn splendour. (p. 25)

いや、ひどいものではない、ただ事実であるだけだ、とスマイリーは腹のなかでこたえた。彼は撃たれ、わたしはその死をこの目で見てきた。きみたちもそうすべきではないのか。(62 ページ)

No, it wasn't awful, it was the truth, thought Smiley. He was shot and I saw him dead. Perhaps you should do that too. (p. 44)

この訳文を原文と対照させて読むたびに思い出すのは、辻由美著『翻訳史のプロムナード』（みすず書房）に紹介されている「不実の美女」という言葉だ。17 世紀半ばのフランスで好まれたペロー・ダブランクールPerrotin de La Blanchèreの翻訳について、メナーージュという大学者が「私がトゥールでふかく愛した女を思い出させる。美しいが不実な女だった」と評したのが、この言葉の由来だという。「17 世紀のフランスは不実の美女が栄華を誇った時代であった。この時代の翻訳の多くは読者に好まれることを第一とし、削除するのも付け加えるのもほとんど自由自在だったといってよい」と辻由美は論じている（同書 108～109 ページ）。

翻訳では、原文への忠実さと訳文の美しさは両立しないというのが通り相場になっている。原文から思い切って離れれば、美しい訳文ができるかもしれない。だが、原文に忠実であろうとすると、醜く読みにくい文章になるのが普通だ。何も削除せず、何も付け加えない忠実な翻訳で美しい訳文を書くことは、辻由美流にいうなら「誠実な美女」になることは、翻訳家に

とって不可能への挑戦だとされている。

ところが、ところがである。『スマイリーと仲間たち』で、村上博基はまさにこの不可能にかぎりなく近い翻訳を行っているのだ。まず訳文を読んでみる。小説はこうでなくてはと思える文章になっている。つぎに訳文と原文をじっくりと比較してみる。ほとんど逐語訳といってもいいほど、原文に密着していることに驚くはずだ。一語一句が丁寧に訳されている。どの語句がどの語句に訳されているかが、すべて分かるように訳されている。

もちろん、普通にいう意味での逐語訳ではない。英和辞典に書かれている訳語をそのまま使っているわけではないからだ。

たとえば by tradition は「例のごとく」と訳されることにはなっていない。だが、この句の意味をよくよく考えると、「例のごとく」がまさにぴったりの訳語であることが分かるはずだ（ちなみに、tradition = 「伝統」とするのは、学校英語の間違ひのひとつだ）。

また、not in Paris at all が「こんどはパリではなく」と訳されており、やはり英和辞典にはない訳語が使われているが、この句の意味を考えれば、これしかないと思える訳である。

3 つ目の引用では、thought Smiley を「～、とスマイリーは腹のなかでこたえた」と訳している。英和辞典で think の項を引いても、「腹のなかでこたえる」という訳語が載っているはずもないが、この文脈でこの語がどのような意味で使われているかを考えれば、これ以外の訳語は考えにくいと思えるほどである。

このように、訳書のどの部分を見ても、何も削除せず、何も付け加えない姿勢がはっきりしている。それでいて、美しい訳文になっている。まさに、「誠実な美女」ではないだろうか。

翻訳というと、読者のことを考えもせず、文法書が英文解釈の教科書が教える訳し方と英和辞典が示す訳語をそのまま使った「難解な」ものが、そうでなければ、「読者に好まれることを第一とし、削除するのも付け加えるのもほとんど自由自在」のものかしかないように思える。しかし、村上博基の訳文を読むと、「誠実で美しい」訳文がありうるということが分かる。まさに名訳である。

## 翻訳教育は可能か

翻訳を長くやっているからか、翻訳を教えてほしいという依頼を受けることがある。最近もそういう依頼があったが、受講者からお金をいただくのであればとてもできないと言って、お断りした。無料で非公式のものならいいが、有料の講義はとてもできないと思ったからだ。

そう思う理由はいくつかあるが、最大の理由は、何年前かに翻訳学校で教えたときに苦しい思いをしたことにある。なぜ苦しかったかという、かなりの受講料を払って学びにくる受講者がうまくならなかったからだ。これではまるで詐欺ではないかと、自己嫌悪に陥っていった。

どんな仕事でも、ある程度慣れてくると、後進を指導する立場に立つ。たとえば新卒で就職したときのことを考えてみると、仕事を教えてくれるのはたいてい、入社から数年たった先輩だ。30歳にもならない若手が、新人を教育する役割を担っているわけだ。これが常識である。翻訳の世界だけは例外だと考える理由はない。ある程度の経験を積んで、仕事に慣れてきたのであれば、後進を指導するのが当然である。

じつのところ、仕事のなかで後進を指導する役割なら、20年近く前から担ってきた。いまも少しずつだが続けている。だから、後進の指導はしないというわけではない。しかしこれはあくまでも、仕事の一環として行っていることであり、講師料をもらったりはしていない。新入社員に仕事を教える若手社員が講師料をもらっているという話を聞かないし、新入社員が受講料を支払ったという話も聞かない。それと同じだ。

若手が翻訳したものをチェックするとき、発注者からチェック料をいただくことはあるが、これは性格が違う。翻訳チェックは一つの仕事なので、発注者から要請があれば、仕事として取り組む。若手からチェック料をもらうわけではない。

翻訳学校などで教えるとなると、これとは次元がまったく違う話になる。翻訳を学ぶために受講料を払ってくれる受講者に、どう翻訳すれば商品になるのかを教えなければならない。それも、応用がきく形で教えなければならない。そのためには、翻訳のノウハ

ウを確立し、ノウハウを伝える術を確立しなければならない。そこまでのことはできていないと思う。他人のことは分からないが、少なくとも自分にはできていない。

仕事のなかで後進を指導するとき、基本的には翻訳ができる人だけを対象に、業界のしきたりやちょっとしたコツなどを伝えるだけでよかった。翻訳ができない人は教育しても時間の無駄だという姿勢をとることができた。

基本的には翻訳ができる人というのは、外国語を読む力か、日本語を書く力か、どちらかが十分にある人だ。これが出発点である。

まず外国語の文を読む力だが、とくに構文解析を間違いないことができることが重要である。翻訳を考えるときの力ぎは外国語ではなく日本語だし、翻訳は語学の仕事ではなく、日本語でものを書く仕事だが、外国語が読めなければ、翻訳はできない。これは当たり前の話である。

----ちくま学芸文庫----		----ちくま新書-----	
		320	355
酒井邦秀	快読一〇〇万語！ ペーパーバックへの道	二木麻里・中山元	英単語のあぶない常識 翻訳名人は訳語をどう決める 山岡洋一
		法書	
		書かれたためのデジタル技	
		二木麻里・中山元	
		大学には合格した。でも英語ができるようにはならなかった。学校英語の害毒を洗い流すための処方箋	はままでに、ohan はしはしは、ほんとうにそうなのか。辞書の訳語の落とし穴をつく。
		辞書はひかない！ わかんモノの英語が自然に身につく奇跡の実践講座	
1,000円	1,000円	700円	700円
筑摩書房 東京都台東区蔵前2-5-3 サービス・センター 048 (651) 0053 <a href="http://www.chikumashobo.co.jp">http://www.chikumashobo.co.jp</a>			

構文解析というのは、SVOO とか SVC とかである。構文解析など時代後れだという人が少なくない。たしかにそうかもしれない。構文解析などできなくても、英会話はあるし、英語の本は読めるという意見もある。たしかにそうだ。読むという点についていうなら、英語の本を大量に浴びるほど読めば、文法など知らなくても読めるようになる。これはたしかだ。だが、もうひとつ、たしかな事実がある。構文がわからなければ、外国語の本を読めても翻訳はできない。翻訳という作業は、読むこととはまるで違う。はるかに細かく、はるかに深い。構文を解析できなければ、歯が立たないのが現実だ。

もうひとつは日本語力だ。翻訳とは日本語での執筆の仕事であり、翻訳の仕事をするからには、商品になる文章が書けなければならない。ところが、翻訳は語学の仕事だと考えていて、日本語を書くという面には無関心な人が少なくない。

商品になる文章を書く力があれば、英語を読む力が少々弱くても、翻訳を続けていくと急速に力がつくのが普通だ。理由は簡単だ。原文を読み間違えた場合、文章が書けなくなるか、書いた訳文が文章にならなくなることが多い。そうなったとき、どこか解釈が間違っているはずだと考えて、原文を読みなおす。辞書を調べ、用例を調べ、文法書を調べて、何とか読み解こうと努力する。この努力を繰り返していると、自然に読解力がついてくるのだ。商品になる文章を書く訓練を受けたこともなく、修行をしたこともない場合には、こうはなりにくい。どんなにみっともない訳文を書こうが、原文の解釈を間違えたことになかなか気づかない。訳文を読み、原文の読解の間違いに気づいて読みなおすというフィードバックの仕組みが働かないのだ。

英文の読解と構文解析か、日本語の執筆か、どちらかひとつがしっかりしていれば、翻訳の教育も可能かもしれない。だが、そこまで力がある人はめったにいない。また、そこまで力のある人なら、翻訳教育など不要だといえるかもしれない。必要なのは、教育を受けるのではなく、仕事を受けることだといえるかもしれない。

要するに、翻訳教育でできることには限界があるのだ。少なくとも、自分が講師になる場合には。

翻訳を学ぼうとする人たちが必要としているのが翻訳教育なのかどうか、おおいに疑問だと思う。何より

もまず、日本語の執筆と外国語の読解を学ぶ必要があるのが通常だ。ところが、この2つは、1週間に2時間程度の授業を受けて学べるほど簡単ではない。たぶん、年単位の努力が必要なものだ。

たとえば、毎日の通勤時間と土日の休みを使って、週に1冊ずつ外国語の本を読む。これを2年間続ければ、100冊になる。同時に、いやというほど難しい本を1冊だけ、構文解析をしながら繰り返し読む。これでようやく、出発点に立てる。

またたとえば、好きな著者の全集を読み、とくに好きな作品をまるごと原稿用紙に書き写す。これでなんとか出発点に立てる。

ひとりではとてもできないのであれば、スパルタ式の教育機関が必要かもしれない。週に2時間ではなく、週に最低6日、1日10時間の訓練を最低2年間行う。こういう教育が必要なかもしれない。

はっきりしているのは、英語の読解力も、日本語の執筆力も、翻訳の実力も、ノウハウ書にまとめられるようなものではないし、ノウハウ書を読んで獲得できるようなものではないことだ。仁平和夫は金持ちと貧乏人の違いをこう喝破している。「金持ちは歴史と古典を読む。貧乏人はハウツーものを読む」。ノウハウ書なんぞを読んでいては何もできない。これだけははっきりしている。

**好評** 翻訳論から知の最前線に迫る！

## 翻訳とは何か - 職業としての翻訳

山岡洋一著 四六判・290頁 本体1,600円

甞る名著 - 絶妙に英訳された15万用例

## NEW 斎藤和英大辞典

斎藤秀三郎著 B5判・1,400頁 本体14,200円

TranRadar 電子辞書 SHOP

<http://www.nichigai.co.jp/translator/>

定番電子辞書をお手ごろ価格でご提供しています

日外アソシエーツ <http://www.nichigai.co.jp/>

〒143-8550 東京都大田区大森北1-23-8 03-3763-5241

## 『国富論』既訳の問題点 - 第1編第3章

アダム・スミス『国富論』の既訳を検討しながら、新訳の可能性をさぐる作業を少しずつ続けている。検討対象の既訳は以下の通りである。

- (1) 竹内健二訳、東大出版会、1969年
- (2) 大内兵衛・松川七郎訳、岩波文庫、1959年
- (3) 水田洋訳、河出書房新社、1970年
- (4) 大河内一男監訳、中公文庫、1978年
- (5) 水田洋監訳、杉山忠平訳、岩波文庫、第1刷、2000年
- (6) 水田洋監訳、杉山忠平訳、岩波文庫、第2刷、2002年  
(上記の改訂版)

これだけの既訳があり、それ以前にも大内訳などいくつもの名訳があるのだから、いまさら新訳を出す意味も余地もないだろうと思えるかもしれない。しかし、決定的な点で既訳には問題があり、新訳の余地が十分にあると考える。そう考える理由をあげておこう。

上記の6つの既訳のなかでもっとも古いのは竹内健二訳であり、初版は1921~23年に出版されている。訳者が26歳から28歳にかけて刊行されているのだ。それも、大学を卒業して会社勤めをしながら、夜に自宅で訳していたのだという。すさまじいことだと感嘆するしかない。

その竹内健二が1955年に行った講演で、スミスの同時代人に、ローマ帝国の興亡史を書いたギボン、有名な雄弁家のエドモンド・パークがあり、「パークはわれわれに喋ることを教える、ギボンは文を綴ることを教える、アダム・スミスはものを考えることを教える」といわれたと語っている(アダム・スミスの会・大河内一男編『アダム・スミスの味』東大出版会、27ページ)。

また、スミスの伝記を書いたハーストの言葉を紹介して、こう述べている。

……だから、彼はさらにつづけて、ウェルス・オブ・ネーションズというものは、普通の子供の初めに読む本以上に誰でも初学者にもっとも適当だろうと結んでおります。……「誰でも経済学の初学者に」とはいいいませんで、誰でも初めて本を読む人にもっとも適する面白い本であるといっていることは、これはなかなかサジェスティブなことではないかと

考えます。(同19~20ページ)

『国富論』が経済学を論じた本ではなく、経済の見方を論じた本であることは、ある意味で常識だが、竹内はそれだけではないと語っている。「ものを考えることを教える」本であり、「誰でも初めて本を読む人にもっとも適する面白い本である」というのだ。竹内は同19ページで、「じつは独り初学者だけでなく、いな、むしろより多くの老人が読んで面白いだらうと私は思うのであります」とも述べている。

要するに、『国富論』は経済学を学ぶ若者や老人にかぎらず、本を読み、ものの考え方を知りたいと考える人すべてに適した傑作なのだと言内健二はいう。

『国富論』を原著で読むと、なるほどそうだと思うはずである。たしかに250年近く前、アメリカ独立宣言の年に発行された本なので、いまの英語とは言葉が違い、文法が違う部分もある。つづりも若干だが違う。しかし、少し読み進んで慣れてくると、なんということなく読める文章なのだ。そして理論ではなく、事実を中心にして論を進めているので、決して難解ではない。思わず笑ってしまうような話もたくさんある。経済について考えるときのヒントがたくさんある。発売当時にたいへんな評判になり、その後も200年以上、読み継がれているのも当然だと思う。

ところが、既訳の大部分はよほど覚悟を決めて読まないかぎり、とても読み進められない。文体は重く、言葉は難しく、意味不明の文もきわめて多く、楽しんで読むなどは考えられない。

既訳の大部分は文章のスタイルという点で、アダム・スミスの文章とは似ても似つかぬものになっている。アダム・スミス本人が読んだら、苦笑するか、怒りだすのではないかとすら思える。

具体例をあげてみよう。第1編第3章でスミスは、市場の大きさによって分業が制限されると論じている。そして、水上輸送が使えれば、陸上輸送だけに頼るより大きな市場が開けるので、産業はまず、海や大河の沿岸で発達すると論じる。その部分に以下がある。既訳のうち、典型例をみてみよう。

……国の内陸部では、長いあいだ、その周辺の地方以外にはその財貨の大部分にとっての市場がなく、海岸や航行可能な大きい河川から隔絶されていた。したがって内陸地帯の市場の大きさは、長いあいだ、その周辺の地方の富と人口密度に比例せざるえなかったし、またしたがって、内陸地帯の改善は、その周辺の地方の改善よりいつも遅れざるをえなかった。……（大河内監訳第1巻34～35ページ）

……その国の内陸地帯は長いあいだ、そのまわりにおいてそれを海岸や航行可能な大河から隔てている、周辺の地方以外には、品物の大部分にとっての市場をもつことができない。そのため内陸地帯の市場の範囲は、長いあいだ周辺地方の富と人口に比例せざるをえず、したがってまたその改良はつねに周辺地方におくれざるをえない。……（水田監訳、杉山訳第2刷第1巻46ページ）

… The inland parts of the country can for a long time have no other market for the greater part of their goods, but the country which lies round about them, and separates them from the sea-coast, and the great navigable rivers. The extent of their market, therefore, must for a long time be in proportion to the riches and populousness of that country, and consequently their improvement must always be posterior to the improvement of that country.

この短い文章にいくつもの問題がある。第1に、大河内訳と水田・杉山訳で「海岸や航行可能な大きい河川から隔絶されていた」の部分の解釈が違っている。竹内訳、水田訳は水田・杉山訳と同じ解釈であり、大内・松川訳は大河内訳と同じ解釈である。おそらくは水田・杉山訳が正しく、そうでなければ separate に三単現の s がついている理由が説明できない。大河内訳は間違っているとみられる。

だが、水田・杉山訳には別の問題、第2の問題がある。「そのまわりにおいてそれを海岸や航行可能な大河から隔てている、周辺の地方以外には」とはいったいどういう意味なのだろう。

原文を読んでもみると、3つの場所の関係がかなりはっきりと書かれている。まず、ここで主題になっている内陸地域がある。つぎに「周辺の地域」がある。そしてもうひとつ、海岸や大河がある。そして、内陸地域と海岸や大河の間に「周辺の地域」があるのだ。つまり、「周辺の地域」とは近くにある沿岸地域なのだ。

ためしに、自分が住んでいる町や生まれ育った町と

その周辺を思い浮かべてみる。海や大河、そこから離れたところにある町などを思い浮かべる。そして、トラックなどない時代、重いものは馬車で運ぶしかなかった時代にどうだったかを考えてみる。いまの時代にはたぶん、水上輸送より航空輸送の方が大切だから、空港、その近くにある町、空港から遠く、高速道路からも離れたところにある町を思い浮かべてみてもいい。そして、アダム・スミスがここで何を語っているのかを考えていく。

こう考えていくと、既訳の第3の問題がみえてくるはずである。「したがって」「そのため」以下の部分が理解できないのだ。「内陸地方の改良・改善はつねに周辺地方に遅れる」では、よく言えば難解、悪く言えば支離滅裂という印象しか残らない。内陸に A という町がある。その周辺に B や C という町がある。ところが B や C からみれば、A も周辺ではないか。どこがどこに遅れるというのか。

だが、原文を読めば「周辺地方」がじつは、周辺にある地域のすべてを指しているわけではなく、内陸地域と海岸や大河の間にある地域、つまり沿岸地域だけを指していることがはっきりしている。「内陸地域の改良・改善はつねに沿岸地域に遅れる」と書かれているのだ。こうなら半分は分かる。内陸地域は陸上輸送に頼るしかないが、沿岸地域は水上輸送を使えるからだ。

だがこれでもまだ、分かったような分からないようなという印象が残る。残る分がりにくさは「改良・改善」の部分だ。これは improvement の訳語である。たしかに英和辞典に書かれている訳語だが、意味を正しく伝えているかどうか、おおいに疑問だと思える。英和辞典に書かれていようがいまいが、原文の意味を正しく伝える訳語を選ぶのであれば、おそらく「発展」か「進歩」だろう。「内陸地域の発展はつねに沿岸地域に遅れる」であれば、ほぼ分かる文になるはずだ。自分が住んでいる町や生まれ育った町とその周辺を思い浮かべて考えてみれば、なるほどと納得できるはずである。

念のために付け加えておくが、以上の点を水田洋や大河内一男が分かっていなかったと言おうとしているのではない。原文を読めば分かる点なのだから、アダム・スミス研究者として知られた学者が分かっていなかったはずがない。意味が分からないからと解説をお願いすれば、はるかに丁寧に、はるかに深く意味を説明していただけるに決まっている。問題はまったく

違ったところにある。原文を読めばスミス研究者でなくても読み取れることが、訳文を読んだ場合には読み取れないところにあるのだ。原文は外国語で書かれており、訳文は母語で書かれているのに、原文の方が意味を理解しやすいのである。

原文を読めば読み取れることが、訳文からは読み取れない。ここに既訳の最大の問題がある。「経済学の初学者」でなくても読める本、「初めて本を読む人」に適した本のはずなのに、既訳では、経済学をよほど学んだものでなければ、あるいは解説がなければ理解できるはずもなく、「ものを考えること」を学べるはずもないものになっているのだ。

このように書くと、おそらくすぐに反論が返ってくる。翻訳というからには解説や解釈ではなく、原文に忠実でなければならない、たとえば「内陸地域の発展はつねに沿岸地域に遅れる」というのは意識であり、アダム・スミスはそうは書いていないという反論である。

この反論に対しては、2つの点を指摘できる。第1の点は、「沿岸地域」と訳すのが意識だということであれば、「周辺地方」と訳すのも意識であり、しかも間違った意識だというものである。原文には、that country と書かれている。そして、原文を読めば、この that country が、the country which lies round them, and separates them from the sea-coast, and the great navigable river であることが分かる。これを「周辺地方」と訳すのは、かなりの問題ではないだろうか。

第2の点はもっと根本的である。「原文に忠実」という言葉の意味をおそらくは間違っているとらえているというものだ。

大河内一男にしろ、水田洋にしろ、もちろん、アダム・スミスの意図を十分に理解しているはずだ。だが、意図を理解することと翻訳することとは違うと考えている。翻訳は、原文に忠実でなければならない、だからこのような訳文でなければならないと考えているのだ。

翻訳は原文に忠実でなければならない。たしかにそうだ。だが、忠実でなければならないのは、原文に対してであり、英和辞書に書かれている訳語に対してではないし、文法書や英文和訳の教科書に書かれている訳し方の原則に対してでもない。原文に忠実であることが至上命令である。英和辞典の訳語や英文和訳の原

則を使ったのでは原文の意味を伝えられないのであれば、英和辞典の訳語や英文和訳の原則から思い切って飛躍しなければならない。これが原文に忠実ということの意味のはずだ。

そして、原文に忠実であるとは、原文のスタイルに対しても忠実であることを意味する。「初めて本を読む人」に適した名著、「ものを考えること」を学べる名著が、解説抜きには読めない訳書になるとすれば、それは原文に忠実でない証拠だというしかない。原文に忠実に訳すというからには、訳書も、「初めて本を読む人」に適した本、「ものを考えること」を学べる本になっていなければならない。

既訳のほとんどは、忠実であるべき相手を間違えている。原文にではなく、英和辞典や文法書、英文和訳の教科書に忠実に訳しているのである。

以上のような観点から既訳をみると、いちばん古い竹内健二訳が、原文のスタイルに忠実な訳に比較的近いように思える。ただし、竹内がいう「子供の読む桃太郎や金時の本」（前掲書 19 ページ）のように読める本にはなっていない。論語や孟子の素読で鍛えられていなければ、なかなか読めない。いちばん新しい水田・杉山訳はおそらく、原文のスタイルからかなり遠い。大内・松川訳よりも後退しているように思える。大河内訳は竹内訳ほどではないが、大内・松川訳より原文のスタイルに比較的近い。最悪なのがおそらく、河出書房版の水田訳であり、これはもう、読むに耐えない悪訳である。

いまの時点で新訳の余地がどこにあるのかといえば、論語の素読で鍛えられてはいないが、経済に関心を持ち、日経新聞を読んでいる読者が楽しく読める訳ではないかと思う。もちろん、日経新聞の読み方の本が売られているほどだから、これは「誰でも楽しく読める」という意味ではない。だが、経済に関心をもつ読者が「初めてを読む」のに適した本、「ものを考えること」を学べる本にすることは可能なように思える。